



## 理事会だより (2・13)

- 一、立春青空句会報告、事前投句と当日投句の選句は別に行つた方がいいとの提案あり。(事業部)
- 二、梅まつり俳句大会報告 ①結社賞は青梅・おほる・鹿火屋・香雨・こよろぎ・草むら・零・鷹・沈丁・春野・みなみ・実のり・山北の全グループから提供  
②兼題、当日題とも季を徹底する要あり。(事業部)
- 三、合同句集第十三集の外部寄贈配布完了 (48箇所)、なお残部の追加販売への協力要請。(編集委員長)
- 四、協会報郵送料を新年度から千円上げの二千円でお願いすることを承認。(理由は本号12頁 総務部)
- 五、総会案内通知配布。(総務部)
- 六、新会員・鈴木洋子さん(沈丁)

理事会日程 4/10 5/8 定期総会 4/24  
(毎月第2木曜日 けやき15時より)

## 「俳句おだわら」10句抄 (690号より)

- 大いなる懐に今冬銀河  
地の底の秋思汲み上げつるべ井戸  
木枯や医師に網膜覗かれて  
木枯しやシユシユツと圧力鍋の音  
日の移る山へ反り身の蜜柑挽き
- 田中幸子 抄出
- クラス会皆ふつくらとなり小春  
書棚より詩集一冊冬ごもり  
膝掛のタータンチエック午後のお茶  
浮雲や宇宙への夢冬ぬくし  
ファヨルドの空は狭しよ白鳥座
- 伊藤はる子  
神山つとむ  
西賀久實  
高橋小糸  
田下昌人  
近藤久江  
来田新子  
北村文江  
市川めぐみ  
山本すみ

小野菊土 抄出

煮凝をつついて話す今日のこと  
書棚より詩集一冊冬ごもり  
冬桜空青すぎて硬すぎて  
身のどこか軋む音して冬に入る  
北風も合わせて配る郵便夫

大澤 紀子  
神山つとむ  
二見 和江  
市川めぐみ  
横塚 昌平

石井きよ子  
北村 文江  
小澤 園子  
岡田 典代  
山田 照子

石井きよ子  
北村 文江  
小澤 園子  
岡田 典代  
山田 照子

## 第61回小田原梅まつり俳句大会(二月九日)

事前投句に一五五名四八八句、大会に六三名参加、

UMECOに於て開催しました

兼題入賞作品（兼題「梅、余寒」）

神奈川県知事賞

白梅や老いて素直のむずかしき

小田原市観光協会会长賞

梅一輪吉報のごと解けたる

神静民報社賞

一札に弓場引き締る余寒かな

小田原俳句協会会长賞

梅の香もたたみて母の入院着

以下俳句協会賞（二十位まで）

白鷺の足一本の余寒かな

記念樹の子らは還暦梅香る

帰りきて鍵おく音の余寒かな

全身で笑うみどり児梅日和

覗き見る鏡に潜む余寒かな

梅ふふむ画室に遺る未完の絵

老梅の力抜きたる真白かな

警策の乾きし音にある余寒

梅咲いて兜太の青鮫が来るぞ

しばらくは万葉人となる梅林

手話の手の流暢にして梅ひらく  
菜を洗ふ水の硬さよ余寒なほ

芳賀 陽子  
川杉三千子  
岡本 保

また一人友の名を消す余寒かな  
鍵穴に鍵の通らぬ余寒かな

清水 吞舟  
神山つとむ

まんまるの嬰のこぶしや梅香る

小野 菊子  
西賀 久実

（小田原俳句協会名誉会長）佃 悅夫特選

赤兎笑ふ度にばつばつと梅わらふ

西岡 青波

（小田原俳句協会顧問）池田 忠山特選

須田 聰子

梅の香もたたみて母の入院着

須田 聰子

一札に弓場引き締る余寒かな

（沈丁俳句会代表） 審子山京子特選

紅梅や地球儀ぐるぐる回つている

（草むら俳句会代表） 佐々木重満特選

大石 雄介

館内に刀文列なる余寒かな

（こよろぎ代表） 神山つとむ特選

近藤

余寒この硯の海に陽の舞ひぬ

池田 忠山

戦中の母の生活を知る雛

（小田原市長賞）

青波

西岡 青波

小田原商工会議所会頭賞

老二人七曜忘れ春炬燵

小田原俳句協会会长賞

城といふ真白き翼春景色

(以下二十位まで)

雲雀鳴く生涯同じ土に生き

あたかや端布はみ出す小抽出

野良に出て一鉤ごとに春広げ

豆腐屋の槽に光や春來たる

大空の風を解きて揚雲雀

揚ひばり天にレールのある如し

梅東風や関八州を統ぶ城下

行く道は帰る道なり名草の芽

待つといふ心を解かす雨水かな

揚雲雀丸い地球が見たいから

夕雲雀きれいに売れて惣菜屋

灯台のゆるぎなき位置春怒濤

春塵頬のゆたかな阿弥陀仏

穴出でし蟻が切手を買いに行く

二ヶ月の太陽金貨ばらまいた

反抗期真つ只中や竹の秋

下萌の足裏へ返す弾みかな

加藤かほる

老梅を伐らしてもらふ清め塩  
卒業す方位磁石の指さぬ道  
野にあそぶ梅花はらはらへのへの字

片野 節子  
峯尾ユキエ

池田 忠山

立春眼に入りては逸れて濠の鴨  
立春と言へども風の平手打

池田 忠山

中根登美子

立春をついばむ鳩や小田原城  
立春をつゝみに岩を掘み立ち

長谷川きよ志

菅沼とき子

寒風や松は巖を掘み立ち  
ものの芽の白亞の城を支へけり

小野 菊士

中村 昌男

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

須田 聰子

瀬戸 りん

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

小林 環

菅沼とき子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

米山 翠

高木 登美子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

若村 京子

長谷川きよ志

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

村場 十五

川本 育子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

中田 笑子

鳥海 壮六

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

田畠ヒロ子

西郷 節子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

川本 育子

尾崎 竹詩

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

大西 和子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

岡本 保

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

木村 幸枝

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

伊藤あつ子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

大石 和子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

鈴木 幸子

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

老身の力いっぱい梅の城

立春をつゝみに岩を掘み立ち  
もの芽の白亞の城を支へけり

木村 幸枝

## 「新作8句」鑑賞（一月号より各一句鑑賞）

ごろ寝せばのた搏つばかり入道雲 佃 悅夫

青空に泛んでいる綿のような塊の積雲は大気が不安定になると、モクモクと上空へ成長して坊主頭の雄大積雲になるが、これが入道雲だ。ほぼ限界に達すると頭が平らになり、毛が生え、多くはかなとこ雲を伴つて雷や雹、突風を引き起し、大雨を降らす積乱雲へと変貌する。はて扱、かなとこ状の沼田場では坊主頭の妖怪・大人道がぬた打ち、ぬた浴びさながらにころげ回つてゐるのだろうか。いずれにせよ下界にあつては端迷惑な話である。

（小島ノブヨシ）

幼へと吹きくぼめでは七日粥

池田 忠山

六日年越しを経て、松の内の最後の朝の七日粥は、万病を防ぎ一年の邪気を払うとされる縁起物。家族で囲む朝の食卓で、祖父が幼い孫の粥を吹いて冷ましてやる。粥は粘りがあつてなかなか冷めないので。「吹きくぼめでは」から、粥の粘り具合と何度も吹いている様子が見え、穏やかで微笑ましい家族の様子が浮かび上がる。この家族に幸あれと祈りたくなる句である。

（瀬戸りん）

新刊本その僕にせり去年今年 新井たか志

新刊本の魅力は、未知なる物へのワクワク感と、新刊ならではの匂いだろう。その本に幾度となく視線は浴びせるが、いつこうに手は伸ばさない作者。新年を迎えた厳かで晴れやかな心と、歳末の慌しさが微妙に交錯する「去年今年」との配合は感慨深い。「僕」の漢字も効いている。

不意に、梶井基次郎の短編のラストシーン……塔のごとく乱雑に積み上げられた本の、その上に鎮座する檻檻が鮮やかに浮んだ。

（竹下由里子）

葱坊主同士の交信カツパドキヤ 大石 雄介

葱坊主は見るからに愛らしく憎めない。時には風に靡いて同調しあつたかと思えば、諍いのよう押し合ひへし合い。ちょうど森の妖精が繰り出しアニミズムの世界を展開する「もののけ姫」の景。そして背丈も伸びて凛々しくなる頃には強い意志をもつた青年僧の貌を呈する。文明の垣堀だつたカツパドキア。様々な人種・民族・宗教・言語、そして商品が交錯。その景は葱坊主が林立するようでもあり、互いに交信するようでもある。

（伊藤道郎）

常の坂なれども今朝の淑氣かな

村場 十五

所属の句会に参加して二年余りですので、毎回が勉強です。この句にある「淑氣」は正月を寿ぐ言葉だと一月の句会で知りました。

いつも散歩で歩き慣れているこの坂道に、今朝は正月ということで、いつもとは違う清新の気が感じられたのでしよう。そして、そこから新たな年の新たな自分への躍動感をも得たのかもしれません。「今年も気持ちを新たに始めていこう。」という作者の「新年の気配」が伝わってきました。

(松下俊之)

おさがりの静けさに覚めまた眠る

陌間みどり

おさがり(御降り)、元日の雨は生きとし生けるものの命を含み息を潜めて降る。なんとも静かで美しい。眠つているとその静けさが体中を巡る。目覚めたときにはすっかり清められて真っ新な気分である。改めて自然の恵みのおかわりをいただくようになると眠りにくく。この上ない幸せなひととき。どんな夢を見るのだろう。この世界、満更でもない。大丈夫だよと、そつと力をもらえるような夢なら嬉しい。

(瀧本敦子)

笛鳴や夕日は藪に濁りたる

畠 梅乃

作者の夕日にに対する絶大な愛を感じた。さまざまな表情の夕日を何度見たことだろう。冬の夕日のさびしさは格別だ。藪に濁っている夕日は梅乃さんの情念かもしれない。日本海に沈む私の夕日も格別だつたな。冬になると大柘植の垣根伝いにチャツチャとせわしい鶯の笛鳴きは、あ! 来ている。とうれしくなる。

去年は三月五日から早朝裏の金柑の茂みで「ケキヨ・ホーチキヨ」と練習中の初鳴きを一週間聞いた。

(大石和子)

枯すすき時間たっぷりありますよ

竇子山京子

枯れ尽くしたすすき野である。寂寥感の極みである。美しくもある。時間とは出来事や変化を認識するための基礎的な概念。単純に言えば「時の流れの二点間」の長さ。圧倒的な寂寥感と美しさの前に立つと時間について考えることが虚しくなる。たっぷりあるはずのない時間。そんなことをいくら考えてみても無駄である。脳髄は変化を繰返しながら死んでいく。時間は未来永劫にあるとおなじみの魂の話に替りこの件は終了する。

(瀬戸正洋)

俳句おだわら（2・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（1・24）

久江報

囲炉裏端破顔三笑掌のほてり  
函嶺の稜線著き寒九かな

待春や鯉の背鰭の浮き加減  
せせらぎの奥より年の明けにけり

高橋 小糸  
足立 和子

左義長や仄かに浮かぶ夜の海  
初日いま水の地球に立ちにけり

山崎 悅子  
湯浅 義幸

十二支をはづれし猫と日向ぼこ

由里子報

復興の灯りの文字や春隣

和田恵美子

パドックの馬の睫毛や風花す

尾崎 幸子

園長の鬼に逃げる子二月来る

星 一義

戸車がはずれ子を呼ぶ水仙花

石田加津子

◆香雨・梅ごち（1・18）

忠山報

青空にはころぶ蕾梅早し

肥後ちさこ

水湊や落語の落ちを聞きそびれ

関戸わよこ

とびきりの笑顔の並ぶお年玉

青山 典子

大寒や己が仕草の鈍きこと

門松 凤文

白粥に梅干ひとつ小正月

拍手のまたもそろはぬ寒さかな  
朝から豆煮る匂ひ小正月  
ふたたびの煮染たつぱり小正月  
沖波のさながら螺鈿初景色

吉田 康雄  
隅間みどり

朝から豆煮る匂ひ小正月  
ふたたびの煮染たつぱり小正月  
沖波のさながら螺鈿初景色

小澤 純子  
池田 忠山

◆こよろぎ（1・17）

つとむ報

夫婦箸おろして囲む節料理  
靴の紐しつかと結び年新た

大澤 紀子  
高杉掘三朗

開け放つお通夜の席や寒の入り

板谷 雅泉

名水の響きを遠く冬桜

植松テル子

一夜明け部屋のものみな淑氣満つ

神山つとむ

◆おほゐ（2・12）

きよ子報

露の臺あやす大地を押し退けて

廣田 悅子

春光や身じろぎもせず鳩六羽

原 仁子

稜線の少し膨む春浅し

松良 繁美

冬薔薇じっと堪えて輝けり

安池 利枝

探梅や君を偲びて今日一日

二上 光子

百年を記憶の大地ふきのたう

横塚 昌平

春の海引揚船から見る緑

吉井源太郎

薄氷やラップの切目はがすかに

石井千代子

平和とは人の心に龜の鳴く

小野 菊土

路の臺出番まだかと風に問う

香川 花子

日没の瞬時焼きつけ二月富士

足柄に風ふくらみて梅真白

老木の今輝かす梅一輪

明日へと踏み出す一步踏の臺

あめつちや万物流転春来たる

薄氷や町の本屋は閉店し

◆沈丁（1・16）

六年の長き短し卒業歌

老いの日々寒さこらえて元気ぶる

運動場叩いて撫でて卒業す

卒業や総代の子の声響き

「よいしょ」とは魔法の言葉山笑う

大雄山線緑町駅雨水かな

緑地なす復興の町風光る

獅子舞のばつくりと呑む梅の風

緑へアーネ間中学卒業す

小さき手の卒園証書ママさがす

穏やかに向かう白寿や薄氷

冬眠より目覚めて亀の瞳は緑

梅三分咲いて七分の日和かな

加藤 春江

瀬戸とみ子

高橋みどり

中根登美子

中村 昌男

中津川晴江

石井きよ子

寶子山報

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

勝木 澄子

菅野 英余

高井 幸子

片野 節子

峯尾ユキエ

清水美代子

松下 俊之

武居裕美子

森田 久江

新緑やマンション住い庭恋し  
白い雲ごめんと言えず卒業す

片恋も卒業証書に巻きこんで

◆春野（1・19）

甘き香を通す浦風千大根

地図読めぬをんな集まる探梅行

春近し指に絡めるほつれ糸

喰うて寝て草臥ればて松明けて

一族の集合離散茶が咲けり

初曆良き絵に良き日疑はず

永らへて昭和百年初景色

◆青梅（2・5）

探梅や妻と連れ立ち里歩き

野沢漬望郷の念湧き立ちぬ

玉子かけ一つ分け合ふ春の朝

あめ玉やポケット五つ防寒着

婆ちゃんの特等席や梅の縁

青空に希望の光初日かな

静止して墨絵の如き寒の鯉

朝寒や固まつて行くランドセル

きよ志報

秋山 昇

瀬戸 悠

内田知江子

尾崎 一夫

二見 和江

長谷川きよ子

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

加藤まり子

久保寺トミ子

田中 幸子

かほる報

小瀬村信子

柳川 紀枝

加藤 富江

川瀬 芳子

鈴木 洋子

寶子山京子

白菜を孃抱くごとく抱いて老母  
朱の椀にみどり広がる雑煮かな  
寒鯉の物言いたげな口と合う  
初句会一人は光の精ならむ

好物の数の子なれど歯がたたぬ  
燃え盛る時に恐ろしどんどの火  
◆零（2・20）

まだ寒き櫻の梢銀河濃し

雪もよいキリンは首をたためない

雨戸開け梅の香をきく春近し

スカンボや通学路日々遠くなり

丹沢は父屏風のように里の冬

張力の漲るトマトをがぶりする

寒月に見られているか背筋伸ぶ

P F A S 汚染土竜おどしは無効です

◆鷹（2・7）

朝明けや破魔矢の鈴の軽き音

今日仰ぐ北斗迄てをる戦なすな

呼び鈴のよく鳴る日なり冬椿

岬へと続く小径や冬椿

福寿草マツサージ器に背預け

白菜を孃抱くごとく抱いて老母  
朱の椀にみどり広がる雑煮かな  
寒鯉の物言いたげな口と合う  
初句会一人は光の精ならむ

好物の数の子なれど歯がたたぬ  
燃え盛る時に恐ろしどんどの火

◆零（2・20）

史郎報  
青木たけを  
伊藤道郎  
佐藤正子  
中村裕子  
川合昌子  
野川木一路  
本多登美子  
岡本史郎  
十五報  
池田令子  
西賀久實  
佐宗欣二  
中田秀子  
百川山笑ふ  
牧の道深き轍のまま凍たり  
夜行バス覚むれば故郷初茜  
締むる帶きゆきゆつと鳴れる淑気かな  
遠慮する子の生くる世や冬銀河  
鵠色に明けゆく沖やなづな打つ  
人日や誰も死なない映画見る  
竹林を揉みゆく風や冬至風呂  
美丈夫の袴捌きや初茶湯  
高僧の説法を聴く梅の宿  
物価高葱一本を使い切る  
辞書めくる音の乾ける寒夜かな  
掘割の忙しき水音春まだか  
朝より鳥語さわがし開き豆  
待春や口当たりよきブランデー  
立春や薄く口紅引く朝  
満天星の花や同窓みな遠く  
山笑う畦行く犬の前のめり  
しりとりに歩く夫婦や山笑ふ  
海見えてここは菜の花明りかな  
蛤の中に絵画や手に包む

加藤れい子  
加藤健治  
市川めぐみ  
豊田幸枝  
齊藤 静  
加藤かほる  
史郎報  
青木たけを  
伊藤道郎  
佐藤正子  
中村裕子  
川合昌子  
野川木一路  
本多登美子  
岡本史郎  
十五報  
池田令子  
西賀久實  
佐宗欣二  
中田秀子  
百川山笑ふ  
庄司下載  
瀬戸りん  
高橋久美子  
中山智津子  
齊藤桂  
芹澤常子  
深澤一華  
加藤幾代  
高橋千代子  
守屋まち  
米山翠  
來田新子  
大島美恵子  
中根和子  
青山典仁  
大沢年子  
澁谷明子  
下平環  
下平美子  
鳥海年子  
山崎美知子  
庄司下載  
瀬戸りん  
高橋久美子  
中山智津子  
齊藤桂  
芹澤常子  
深澤一華  
加藤幾代  
高橋千代子  
守屋まち  
米山翠  
來田新子  
大島美恵子  
中根和子  
青山典仁  
大沢年子  
澁谷明子  
下平環  
下平美子  
鳥海年子

畦焼くや水音水に還らざる

採血に捧げる腕春さむし

◆実のり（2・19）

古屋 徳男

村場 十五

たか志報

春節の美しきランタン地下通り

梅の香や八十路の道の穩やかに

春曙ようよう目覚む富士山箱根

初午の夜は白狐の鳴くだろか

初午や櫛宜の背筋のうら若し

◆草むら（2・19）

畑焼くや服に残りし穴二つ

菜の花の種の全裸を播きにけり

磯菜摘姉さ被りの真白きや

◆無所属

子らの声遊ぶ芽吹きの五合庵

青空に冷えゆくノート寅彦忌

着膨れて高値野菜を素通りす

葉書いっぱいに蠟蠟と書き投函した

カワラヒワまちゅぴちゅして冬桜

本節の香りで始まる節仕度

良寛の書の降るやうな春の雪

たまご酒のたまごを割つて二月かな

みづいろの風切羽が春の土

紅梅に空洞が見え骨粗鬆

白梅の空を透かしてみどり町

寒月光調法律の耳やわらかし

たはむれに触れたり梅の花が咲く

鴨の池めぐりて水尾のひかる位置

句作りは言の葉ゲーム春近し

春よ来い早く来いそんな歌等うたつてゐる

春光の余白焼きそば出来あがる

むず痒き置き場なき鼻春一番

蝌蚪生れ、ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団

二月や塊とんとん崩しおり

逃水を追うてネバダの砂漠にゐ

1頁佐々木重満さん抄出の瀬戸正洋さんの句

1頁大石雄介さん抄出の瀬戸正洋さんの句

（誤）赤い羽根足柄下郡大井町

（正）赤い羽根足柄上郡大井町

（2月号691号）

1頁佐々木重満さん抄出の竹下由里子さんの句

（誤）桐一葉深海魚めく美容室

（正）桐一葉深海魚めく美術室

小澤 園子

岩楯惠津子

田畠ヒロ子

穂坂志げる

山田 照子

神野美代子

山本 すみ

杉山あけみ

大佐田うづき

小島ノブヨシ

岡田 典代

杉崎 せつ

佐々木重満

石井 秀稀

佃 悅夫

小林永以子

畠 梅乃

大石 雄介

大石 和子

出澤 洋子

北村 文江

瀬戸 正洋

須田 聰子

## 歴史は語る

長谷川きよ志

編集部から依頼のお題は「初春」である。何から書こうか？早速手持の歳時記を繙いてみる。

「初春」—旧暦では立春と元旦がほとんど同時にきたので春という字を新年に用いる事が多かつた、とある。更に傍題には「明の春」「今朝の春」「新春」「迎春」「四方の春」「千代の春」と、どの傍題にも「春」が付くのが興味深い。

「立春」と云う文字を見て思い当たる事がある。小田原觀光協会主催、小田原俳句協会（以降俳句協会と表記）主管の恒例の行事「立春青空句会」のことである。

毎年立春のその日、小田原城址公園の梅の木に、会員の俳句作品を短冊に吊して小田原梅まつりの行事に彩りを添えている。城址公園に訪れる観光客に、梅の花と合わせて短冊に吊した俳句を供し、俳句に興味を持つてもらいたい。更には俳句人口を増やしたいと云う先人の思惑があつた事は言うまでもない。短冊吊しの後は天守閣広場にある「本丸茶屋」で名物の「そば」等を食し、その後、お待ちかねの「立春青空俳句会」の開催である。属目により総互選で順位を競う。

さて、こんな型で本文が進んで来たので、これを機に「俳句協会」の歴史と、その中で「春野」の新旧会

員がどう関わってきたのかを紹介してみたい。

そもそもこの「俳句協会」は昭和二十九年に発足して以来小田原市及びその近郊に居住する俳句同好者の活動の基盤として長年に亘って継続し今年で七十年の節目を迎えた。

もう一度「立春青空句会」の短冊吊しの話題に戻るが、このシーズンになると万年幹事の私は春野小田原句会に短冊を持参し、協会員のメンバーに「立春」又は「梅」の句を認めてもらう事が習慣になつていて。

ある年、未だ黛執主宰がご存命の頃、ちょうどその句会に指導者としていらした戸邊喜久雄編集長の二人に揮毫をお願いした。当日会員の欠席が多く集まつた短冊は次の五句。

梅ひらく一枝を水にさしのべて

立春のあしたに谷戸の灯のうるむ

梅二月水音さやと昇りくる

人声の消えて梅の香濃くなりし

梅三分<sup>よつき</sup>四月過ぐればすぐ五輪

長谷川きよ志

黛

執

戸邊喜久雄

秋山

昇

伊藤はる子

因みに私の愚作の下五の「すぐ五輪」とあるのでこの年度は二〇二〇年の東京オリンピック開催年であったが、世界的にコロナが蔓延し大会が一年延期された事は記憶に新しい。

さて歴史的アンソロジーの第一弾の紹介である。

「小田原市民俳句集」として第一集が発行されたのが昭和三十五年十二月と今からなんと六十有余年の事である。

私は第三集の昭和四十八年十一月から参画しているので、その第三集を改めて開いて読み返してみて驚いた。今になつてみれば懐かしい歴史の数々が凝縮されているのである。

私の俳句人生の中で大きく分けて三人の先生に師事した。一人目は私が俳句の基礎から学んだ「野村浜生」である。私の高校時代の文芸部の顧問で、高校教師の傍ら「俳句協会」の俳人でもあつた。

二人目は「鷹」の大御所「藤田湘子」である。小田原出身の湘子は地元への思い入れも深く、鷹の小田原句会で十年近く直接御指導頂いた。

三人目は我等の永遠の親分「黛執」である。実直と

その温かいお人柄は誰もが認める所、春野小田原句会で約二十年、俳句は勿論のこと、文法上の間違いや正しい表記についての厳しいご指導は得難い產物となつてゐる。

奇しくもこの三人の先生が第三集に句を寄せている。「冬岬」の二十句の中から一句。

春水にうつす筵簾の」ときもの

野村 浜生

「夜語り」の二十句の中から一句。

春の昼くれなるの独楽澄む思ひ

藤田 湘子

「水の章」の二十句の中から一句。

雨だれといふあかときの春のおと

黛 執

因みに野村浜生の教え子に現小田原俳句協会名誉会長の佃悦夫がいる。佃先輩は会長として三十二年の長きに亘り、当協会を牽引してきた立役者もある。その功績が認められ平成二十九年に、「小田原市民功劳賞」を受賞している。

恥かしながら佃先輩と不肖の私とは兄弟弟子でもある。時を隔ててゐるとは言え、同じ師に学びながら句柄の違う作品に個性が見える。

体温ありやわらかに水平線もあり  
方円に雨降り年の始まれり

佃 悅夫  
長谷川きよ志

さて、紙幅が尽きた。この拙稿を書き進むうちに月が替わりカレンダーを捲つたら「一家言」欄に「沢山の思い出話しさは老後の心の宝」とあつた。

思わず苦笑すると共に自分が老境に差しかかつてゐる事を諾わざるを得なかつた。  
(文中敬称略)  
(本稿は「春野」誌に掲載されたもので長谷川きよ志氏から提供されました。)

## 高橋久美子

### 冬紅葉戦火なき世の慰靈塔

田中 恵一

今年は終戦から八十年。長く平和が続いています  
が、大戦では多くの人が犠牲になりました。昨年は  
日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、改めて平和  
の大切さを考えるきっかけになつたと 思います。  
かつての戦火の町を見下ろすように建つ慰靈塔は、  
いろいろな事を伝えているのでしよう。鮮やかな  
「冬紅葉」が印象的です。  
考えさせられる深い句です。

## 武居裕美子

(令和7年1月号)

### 豆炭あんか足に生涯残る傷

石井 秀稀

まだ豊かではなかつた時代の、厳しい冬が思い起  
こされました。幼い頃暖をとるために、豆炭あんか  
で火傷をしたのでしょうか。その時の痛みが、寒夜  
に疼くように思い出されるのかも知れません。  
「この傷跡は私が生きるために闘つた勲章」とい  
う難病の手術をした少女の言葉を思い出しました。  
作者の傷跡もまた、人生を生き抜いてきたことの証  
であるように思います。

## （協会報郵送料改定理由）

郵送料は約十年間千円を据え置いて来ましたが、  
この間郵便料金は度々値上げされました。会報発注  
先のご協力も得て節約に務めて参りましたが、昨年  
の郵便料金の改定、印刷費・封筒・宛名シール代等  
諸物価の値上げがあり、また郵送に伴う作業負担も  
あります。このような事情により令和7年度から年  
間二千円に改定をお願いする次第です。

## ☆合同句集13集の追加購入を受け付けています☆

申込先：〒250-0055 小田原市久野一一五三  
一冊 千円

山田照子

☎〇四六五—三四一六五四二

◆お詫びして訂正します◆（2月号 691号）

8頁田畑ヒロ子さんの句

（誤）ソプラノが降つて来そうな冬銀座  
（正）ソプラノが降つて来そうな冬星座